

<行動分析学の歴史インタビュー②>

国内外の行動分析学の歴史に関する資料の収集と保存のプロジェクト、第2弾の今回は、学会創立三十年記念事業実行委員会との共同企画として、わが国の応用行動分析学の草分けであり、本学会初代会長の山口薫先生にお話をうかがいました。

山口薫先生（日本行動分析学会初代会長）

井澤信三（以下、井澤）：山口先生、どうぞよろしくお願いいたします。

山口薫先生（以下、山口先生）：よろしくお願いいたします。

井澤：ではインタビューを始めたいと思います。山口薫先生は、初代会長ということになります。任期は、1983年11月から1984年11月となっているのですが、それ以前も含めまして、学会設立時の状況と課題について、お話いただければと思います。

行動分析学との出会い

山口先生：まず日本に応用行動分析を組織的に導入したのが私、それと続いて東正さんということになると思うんですけども、それ以前にも片岡義信さんってご存知ですか？福島大ね。あの人が昔は宮城県の県立の養護学校の先生をされていてね。それで自分で勉強して実践をしたりしておられたという、そういうこともあるんですけども。組織的導入ということになると私が1967年から8年にかけて、約1年間、フルブライトの研究者としてイリノイ大学のシドニー・ビジュー先生の下で応用行動分析学を学んだことだと思います。

それに続いて、その当時は北海道教育大の先生だった東正君が、文部省の在外研究員として私の紹介で、ビジュー先生のところで1年間学んだこと。それからビジュー先生とベアー先生が1960年に共著で出した「CHILD DEVELOPMENT I: A Systematic and Empirical Theory」を私と東君で、ビジュー先生に勧められて翻訳をして、1972年に「子どもの発達におけるオペラント行動」*1として、日本文化科学社から出版をしたという、これが一つ大きなきっかけになったかなと思うんですね。

応用行動分析学のほうのその後の状況といいますか、展開をもうちょっとお話をしますと、私の場合は東京学芸大学にいましたので、清水直治さん、それからその後中野良顯さんがその頃、学芸大の特殊教育研究施設に新しい部門ができたりした時に、来ていただ

いたりして、ある程度、実践的研究ができたかなということなんです。

私自身はその後、今度は明治学院大学に移り、これもビジュ先生に勧められて日本に導入したポータージプログラムの相談なんかも明治学院大学のプレイルームを使ってやったりしました。

東正さんは、その後文部省の横須賀にあります国立特殊教育総合研究所、特総研に移って、そして横浜国大なんかとも連携をして、主に養護学校、あるいは施設のほうの人たちを主な対象にしながら、応用行動分析学を広める活動をしてくださったわけです。

それで基礎のほうは、ご承知のように一つの中心が慶応大学ですね。

井澤：慶応大学ですね。

山口先生：私は実はビジュ先生のところへ行くまでは、行動分析学は、もうほとんど何も知らないで行って、1年間学んでいく中で、ビジュ先生の講義そのものも非常に学ぶところが多かったんですけども、アメリカのある学会で、ビジュ先生が司会をされていた分科会で、ピーターソンという、その頃は若い研究者でしたけれども、自閉症で知的障害の子どもの自傷、壁に頭をガンガンとぶつけて、血だらけになってるんですよ。それを防ぐためにいつも毛布をかぶせていました。それを7日間、食事のたびに自傷が起こると、お皿を取り上げて、ある一定時間自傷がなければ、向き直って食事を続けるってね。そのプログラムで、1週間できれいさっぱり自傷をなくしちゃったっていう研究。

その研究と、それからもう一つマドセンの、これもよく紹介するんですけども、小学校の低学年の子どもの、授業中の離席行動をどうやって少なくするかというね。これはABAB デザインに、ちょっとバリエーションを加えたような素晴らしい実験プログラムを作って、これも非常に効果があるということが実証された研究。これは夏にビジュ先生の大学院生のクラスでのマドセン自身の報告を私も聞いてね。この二つは本当にこう、すごい感銘を受けましてね。それでもう、私も本気で勉強するようになって。やっとなんとかある程度の勉強ができたんだなというふうに思います。

これも長くなるから載せられないかと思えますけれども、元々はサミュエル・カークっていう、ご存知でないか分かりませんが、その当時のイリノイ大学の心理学の教授でしたが、東洋君は知ってます？

井澤：はい。

山口先生：心理学会の会長もした方ですね。

大河内浩人（以下、大河内）：はいはい。

山口先生：彼とは、旧制第一高等学校の時のボート部で一緒だね。寮で一緒に寝泊りした、1番の仲のいい友人なんですけどね。彼が全部で10何年いたかな、カーク先生のところで心理学を勉強して、助手になった人です。そういう関係で、私がイリノイ大学へ行く年の前に日本でNHKにカーク先生が招聘されて、あちこちで講演をして。その東に紹介されて僕はカークさんを頼ってイリノイ大学へ行くつもりだったら、カークさんがサバティカルかなんかでいなくなって、その後アリゾナ大学へ移って。それでもう途方に暮れてたら、カーク先生が、いや、自分がいなくなっても、こういう有能な、若い、素晴らしい研究者がいるっていうんで紹介してもらったのがビジュ先生なんですね。だからこういう、全くの偶然で幸運に恵まれて、今日の私があるわけで。私にとっては本当に、思ってもみない幸運だったんですね。

日本行動分析学会の誕生

山口先生：皆さんにいろいろ聞かれたりしたことで、アメリカの行動分析学会に佐藤先生と一緒にいったというのはいつかなと、調べてみたら、それが1979年ですか。

井澤：1979年6月ですね。

山口先生：それで、恐らくその前から佐藤先生とはなんらかのかたちで連絡はしていたと思うんですが。僕より若い方ですけども、とにかく日本に行動分析学を導入した第一人者ですからね。だから佐藤方哉先生のところに、電話かけてお会いをしたりしました。佐藤先生は佐藤春夫の息子さんになるわけで、立派な家に住んでおられて、女中さんがいるわけですよ。年配の方ですけどもね。朝もう、9時か10時頃になって電話かけると、「お坊ちゃまは今、お風呂をお召しになっております」って。そんな感じで、そのへんから付き合いが始まって。そしてその1972年に、私が東君と一緒に訳したビジュ先生とペアー先生の本がある程度広がっていく中で、さらにいろいろ話が進んでいって。そして1979年ですね、シカゴに行ったのは。さきにシカゴへ寄って、それからディアボーンへ行ったんですよ。

井澤：それで、（インタビューの前に、山口先生と井澤がメールでやりとりしていた時に）シカゴがでてきたんですね。

山口先生：それが記憶に残ってるんですよ。でも学会のことあんまり記憶に残ってないんですけども。だからそこへ誰が参加したかっていうのがね、どうも手帳見てもちょっと書いていないんですけども。浅野さんがいて、樋口君。これはもう確かなんですね。あと、誰がいたかどうか。

大河内：出口先生と、富安先生。

山口先生：そう。出口さんと富安さんね。出口、富安。この二人はいたかいなかったっていうのはちょっと、記憶にやっぱりないんですよ。それから、応用行動分析学の方はあんまりなかったみたいで。誰が参加したかっていうのは、ちょっと分からない。でもいずれにしても、それがきっかけになって帰ってきて、日本でぜひ学会を、基礎と応用が一緒になって作ろうじゃないかっていう話になって。そしてここにありますように頻繁に、研究会を開いたりする中で、1983年に日本行動分析学会が発足をしたと。こういう経過だと思うんですね。

井澤：日本行動分析研究会を立ち上げるまでは、山口先生が中心に？

山口先生：私と佐藤先生、それから浅野さんと樋口さんね。もうしょっちゅう、とにかくお酒が好きなもんだから、結局行くと必ずそのいきつけの飲み屋でね。飲みながら、かなり、例えば浅野さんと佐藤先生が激論を闘わすんですね。そういうふうな雰囲気の中で我々も仲間に入れてもらって。だんだんそういう気分が盛り上がっていったのかなと思うんですけどね。

応用行動分析関係でいうと、確かに私と、それからもう1人は東正さんですね。「餌付け療法」といったりしたので、その後、あまり親しくなくなってきちゃったんですけども、一応僕と東君が1番最初にそういうふうなことで、学会の設立に関わったということになりますね。

基礎の方はだから、佐藤先生が中心になったという。そちらはそちらでまた、別に調べていただかないと私もあんまりよく。基礎がどういうふうなかたちでっていうところがよく分からないんですけどね。

井澤：その当時の学会というと、行動分析ができる前ですと、例えば特殊教育学会とか、心理学会とか。

山口先生：日本心理学会っていうのは、いろんな関係団体をまとめるようなかたちであったわけですね。だから日本心理学会との関係っていうのは、日本心理学会の傘下にあるいろいろな心理学関係の団体の一つという関係。こういうことになりますよね。東君、東洋のほうね。彼はもちろん行動分析とは立場は非常に違うんだけど、僕なんかを、発達というものをそういうふうを考える立場もあるんだと、一応、ある程度の評価は東君もしてくれたりね。そういうふうな関連ですよ。日本心理学会との関係は。

特殊教育のほうは、これはまたちょっと話が長くなっちゃうけれども、東大の心理学科

で、1年間は割りあいきちんと勉強してたんだけどその頃から学生運動に参加するようになってちゃってね。それでも、あちこちデモに出かけたりなんかして、もう全然授業なんか聞かないでっていうふうなね。

そんなことで、大学も卒業しなくてもいいやって思ったのが、東が卒業だけはしておいて言うんで、何とか卒業して、文部省の教育研修所へ入れてもらって。そこは、その後の国立教育研究所なんですけどね。そこに三木安正先生が、6、3制になって、日本の特別支援教育の歴史は明治20何年から始まってますから長いんですけども、全部小学校の子どもだけですから、6、3制になったらそのあと中学年齢の知的障害の子どもをどうするかっていうんで、実験学級をその研究所に設けられて。

それで僕は現在東京都立の「青島特別支援学校」になってますけれども、その前身で3年間、実際に知的障害の子どもを教える。そこで子どもを実際教えたっていうことが、後々非常に役に立っていて、知的障害の子どもを対象にした応用行動分析学の適用ということに結びつくことになるんですね。そういう意味ではそれも、非常に運が良かったかなと思っておりますけれども。

今では、特に知的障害の子に、今はほら、LDとADHDとかね。ああいうものが新しく加わってきたでしょ。この分野は上野一彦君が中心になってやって。上野君っていうのは僕が東大の非常勤講師やってた時に僕の講義を聞いたりした、そういう仲間なんですけどね。テニスも一緒にやったり、非常に仲はいいんですが。彼自身は応用行動分析学とは全く関係はないんです。そういうLD等の分野の中で、応用行動分析学をこれから実際に適用していくっていう研究を、必ず広げていってもらいたいな。もう私はちょっと無理ですけれども。これはやっぱり課題の一つ。

井澤：あと、行動療法学会はどうでしょうか？

山口先生：そうですね。ただ、あんまり深い関係はないと思うんですよね。それはそれでやっぱり、それぞれ一派をなして、あんまり直接、共同でなんかしようっていうようなかたちではなくて、やっぱり先ほど言ったように、Radical behaviorism ですからね。だから、むしろそういうものとは違うぞっていうところを強調するような面もあったりしてね。だから、それほど直接一緒にやるっていうふうな感じではなかったように思いますよね。

佐藤方哉先生っていうのはね、なんというか。非常に個性がね。厳しい人ですからね。ただ、僕のことはどういうわけか非常に買ってくれたっていうのかな。これはちょっとまたあとの話になるけれども、星槎大学でも学長として教授会でも全部副学長に任せてね。で、なんかポソポソとちょっとと言う程度で。けども、これもまたあとのエピソードになるんだけど、学長になる前に三軒茶屋にトッポジョっていう、佐藤さん行きつけの居酒屋があるんですよ。ちょっと2階に上がっていったところにね。イタリア人の老

婦人がやってるね。常連しか行かないのね。そこへ、次の学長になってもらうっていうんで相談に行って。そして飲み始めたら、飲んでいくごとにすごいんですよ、いろんな、政治から文学から音楽から。ご存知だと思うけれども、ピアノはうまいしね。作詞作曲をやりますしね。それから回文っていうね。あれはものすごい長い回文を作ったりね。そういう、非常に特異な才能を持っておられたりして。

それでもう一つ、これはぜひ入れておいていただきたいのは、学会を作るっていう時に、それじゃあ会長を誰にするかっていうね。僕は「それはなんて言ったって、佐藤先生を」って言ったのに、佐藤先生が、僕が二つばかり年上かな。年長だっていうんで、「いやいや」って推してくださったんですよ。だから佐藤先生に推されて、じゃあ1年間だけっていうことで私が引き受けてね。そして1年経ったあとで佐藤先生が会長に代わって、それから理事会組織という。だから初代理事長っていうことになるのと佐藤さんです。会長ってことになるのと初代が私で、佐藤先生は2代目の会長と同時に初代の学会の理事長っていう。こういうことになるわけですね。そのあとは理事長制度で、今のままやってきてる。こういうことになりますよね。

井澤：その理事長制度というのは、やっぱりその方がよいとなったのでしょうか？

山口先生：そうですね。学会というのは、やっぱり普通理事会を作ってやるのが普通の学会のあり方としては。心理学関係でもそうですからね。だからそういうふうにしていうふうに話が進んだと思います。ただ、僕はそのへんはあんまり記憶がないんですよ。ぜひ理事会制度にしよう。だから佐藤先生はまず、学会の2代目の会長になられて、その時点から理事会についていう話が始まって。そこから私はだから、あんまり直接関与しないで理事会制度に移行したんだと思うんです。そのへんは浅野さんなんかが一番よく知ってるんじゃないかなと思うんですけど。

井澤：では、先生が初代会長の時には、いわゆる事務局はどうなっていたのでしょうか？

山口先生：当初、私の東京学芸大学特殊教育研究施設においていたけど、実際は佐藤先生のところで専らやっておられて。なんていうのかな。正式な事務局っていうふうな感じはなくて。こういう研究会なんかも、学生の方が手伝ったりはしてたと思うんですけども、特にはっきりどなたかっていう記憶はないですね。だから浅野さんなんかはまだ大分若かったんじゃないのかな。浅野さんか樋口君なんか。樋口君はでも、その頃東京にいたかな。なんかしょっちゅう会ってたけれども。要するに飲み屋で、話はいろいろしてきたっていうような感じでしたね。

井澤：あと、会員を増やそうといった動きはどうでしょうか？

山口先生：そのへんがもうちょっと本当はどうなのか。基礎は基礎でやられたんだと思うんですけれども。やっぱり心理学の主流にはなれなかったんですよね。これはアメリカだってそうですよね。アメリカで心理学者の中では行動分析学っていうのは少数派ですからね。日本だってまだまだね。むしろ少し衰退気味っていうような感じもあるわけですよ。だから基礎もこれからしっかりやっておかなきゃいけないけれども。これは私の勝手になるけれども、やっぱり行動分析のスキナー時点までの考え方を貫こうとすると、あんまりこれからは発展の可能性は、ないんじゃないかっていうね。このへんで大転換をしなきゃいけないんじゃないかっていうのがね、1番最後に言いたいのは、私はこれをぜひ変えてほしいなっていう部分になるわけですよ。これは最後のとこですけどね。それはちょっとあと回しにしましてね。応用のほうは、東君のやったことっていうのは、やっぱりあんまり成功してなかったっていう気持ちですよ。だから坂本さんという、滋賀じゃなくて……

井澤：岐阜ですね。

山口先生：岐阜、岐阜。

あの人は熊本の大学、それから養護学校の先生をしてたんですよ。その頃に僕の熊本大学での集中講義を聞いたりして。そして結局、今岐阜大で行動分析学の関係の授業をしておられるんだと思うんだけど。そういうふうなかたちの広がりはあるんだけど、僕自身もとても、今から考えると、もっと訴えなきゃいけなかったなというふうに思うし。だから東正君が大分大学に行って、結局病気になったりしたもんだから。横浜国大もやっておられるけれども、あんまり広がっていくことにはなっていない。

実際には世間一般では、もう、殴ったり蹴ったりしてもだめなんだと。息子のいいところを見つけて、息子を褒めてあげてっていうふうなことで。昔は専ら拳骨で殴ったりね。今はいいとこ見つけて褒めるようなね。

大河内：そうですね、変わりましたね。

山口先生：ええ、変わってきているんですよ。変わってるのに、本当は応用行動分析学をしっかり我々が伝えれば、もっともっと組織できちんとやれるはずなんです。そこらへんが、ギャップがあるのをどうやって埋めていくかっていうのが、これが応用行動分析学の今後の大きな課題かなというふうに思いますよ。

行動分析学の未来

山口先生：ポータージプログラムも、これは割り合い組織的に、日本だけじゃなくてアジアの各地、我々がワークショップを、2泊3日で、中国なんか10カ所ぐらい行ってるかな。アジアのほとんどの国へ行ってやっていますからね。そういうかたちでは広がっていて、その特徴っていうのは、一人一人のアセスメントに基づく個別指導計画を立てて、小さい時だから、家庭で親が日常生活の中でっていうね。そういう特色と同時に、原理には応用行動分析学の原理を使う。これが3大特徴の一つなんです。だからポータージプログラムっていうのは、その基礎に応用行動分析学があると考えた上でのプログラムとして、アジアにずっと広がっていく。これは大きなできごとじゃないかというふうに思っております。

結局ビジュ先生もそういうことを書いておられますけれども、要するに行動分析学というのは物理学とか生物学のような、自然科学のストラテジーを基にするんだと。ストラテジーとしては、自然科学の方法論を使うんだということ。発達についての考え方の中で、行動分析学というのは、自然科学の方法を使うんだということが強調されてますね。

そこはやっぱり一つのキーワードになるんじゃないかと思うんですね。それはもうちょっと具体的に言うと、要するに観察可能であって、計測が可能っていうね。だから逆に言うと、スキナーが、脳の中のことはまだよく分かっていないから、それはあれこれ勝手に推測をしていくと、袋小路に入り込んで。もう、ごちゃごちゃして訳が分からなくなると。だから今は外に置いて、観察可能、測定可能な環境からの刺激と行動で人間の行動を分析していこうというふうにしたわけですね。だけでも「エバンスとの対話」の中でも言うように、自分は別に脳の中をブラックボックスというふうに考えているわけではない、ただそれがまだよく分かっていないから、今、外に置いてるだけで。いずれはそういうのが分かってくれば、当然取り入れられるだろうということを予測するようなことを、スキナー自身は言ってるわけですね。だから自分はS-R心理学者でもないって言ってますね。

その後、言語の問題が取り上げられましたが、その時点ではまだスキナーはあくまで行動分析学の原則に従って、脳の中でっていうことは抜きにしてね。その要約はビジュ先生が、分かりやすくと言っても難しいけれども、聞くということ、それから話すということ、その二つの機能に分けてね、解説をしますね。

それが今、脳の研究がその後どんどん進んできて、ここ*2に書いておりますけれども、例えばミラーシステムっていうようなね。イタリアのジャコモ・リゾラッティの、猿の研究をしてるとき、たまたま発見して。そしてそれを元にして、一部だけじゃなくて、それがいろんなところと連合、連携をしながらミラーシステムというかたちで、もうかなりはつきりしてきてますよね。

それから今、ファンクショナルMRIというね。これがビジュ先生の本の中にも、脳波とかCTスキャンとか入ってますけれども、今もう、ファンクショナルMRIでいろんな研究が進んでるわけですね。特にLDなんかでね。LDHDの研究では脳の、ファンクショナルMRIを使った研究も。これはまさに観察可能・計測可能なデータとして出てき

てるわけです。これは当然私は行動分析の中に取り入れていいんじゃないかなと。

もう一つは、これまでほんの一部しか分かってませんけれども、FOX P2というのがね。これは人間とチンパンジーの遺伝子が解明されて、その差が僅か 1.2%なんですね。98.8%一致してるんですよ。チンパンジーと人間は。だから人間とチンパンジーの遺伝子の差というのは、ほんの 1.2%しかないんですね。だからその 1.2%に人間が人間たるものがあるわけで、FOX P2がまた、言葉と非常に関係あるということが今、明らかにされつつあるというね。この研究がもっと進んでくれば、ビジュウ先生のスキナーの Verbal Behavior についての考え方にも、もう少し脳の中の FOX P2 で新しくこれから解明されるようなものを取り込めるようになるんじゃないだろうかというね。

それからもう一つは、これは茂木健一郎さんが書いた、ちょっと啓蒙的なものだからあまり学術的でないかも知れないけど、快楽中枢っていうね。大脳の基底核の黒質から排出される、ドーパミンの作用なんですけどね。それがものすごいスピードで、ある刺激によって脳の興奮してる部分にぶち当たるっていうことで、快楽を感じる、それを快楽中枢っていうふうと呼んでるわけです。その快楽中枢からのドーパミンが興奮してるところにぶち当たるっていうのは、これは正の強化なんです。だから要するに強化の原理というの、脳の働きの中で解明されるのも、私はそんなに時間はかからないんじゃないかと。もちろんまだ、脳の中で分かってるのはほんの僅かで、分からないことのほうが多いんだけど。日進月歩ですけれどね。どんどん研究が明らかになってくれば、脳の中っていうのも観察可能で、計測可能で、実証的なデータがちゃんとしたものについては、行動分析学の中に取り込むことができるんじゃないかと。これは私は今までの行動分析学の脳の中の方を抜きにしてっていう考えから言うと、ちょっと異端的な考え方なんだけれども、この中^{*2}にかなり詳しく書いてありますので。そんなに遠くない時点で、私はもう生きてないかも知れないけども、必ず行動分析学がその考えを広げるような方向に進んでいくんじゃないだろうか。それが私の行動分析学の、今後の課題というか展望というかね。ということなんです。

井澤：ありがとうございます。大河内先生、追加で何かありますか？

大河内：もうたくさんお話を伺いましたので。

井澤：そうですね。

山口先生：ただルリヤ先生ね。これはものすごく面白いですよ。ルリヤの考え方そのものはね。これはあくまでも、直接観察できないとこへ踏み込んで、仮説を立ててるわけですけどね。脳のダイナミックなシステムの、機能局在説というね。これがルリヤの考え方なんです。これがミンスキーなんかの脳の小人の、いろんな小人軍が連携をするっていう

考え方に繋がるんですよ。

それと、フロイトが、死ぬまで、いつか脳の研究が進めば、脳の働きで人間の行動を説明できるようになるだろうと言ってるわけですよ。それが、フロイトが死んだあと、奥さんが資料を古本屋に売っぱらっちゃったんだね。散出しちゃったのをイギリスの政府が全部買い戻して、それが今アメリカの国立公文書館に所蔵されていて、2020年に公開されるんです。フロイトは、脳細胞の発火の法則なんかもちやんと、ヘップよりも先に発表していますしね。元々ヤツメウナギの脳の研究をしていた脳科学者ですから、フロイトは。だからそこにも必ず繋がるんじゃないかと考えております。

井澤：先生どうもありがとうございました。

山口先生：大体そんなもんでよろしいですか？

井澤：はい。

注

*1) Bijou, S. W. & Baer, D. M. (1961) : Child Development I. *Context Press*. 山口薫・東正(1972) : 子どもの発達におけるオペラント行動. 日本文化科学社.

*2) 山口薫 (2014). 共生科学の展望—星槎大学名誉教授就任記念最終講義を中心に—共生科学, 5, 1-14.

インタビュー日：2013年11月17日

インタビュー場所：吉祥寺東急イン

インタビュアー：井澤信三

(学会創立三十年記念事業実行委員)

：大河内浩人

(広報委員)

このインタビュー記事の一部は、日本行動分析学会ニューズレターJ-ABA ニューズ 2014年夏号(No. 75)に掲載されました。紙幅の制約上、ニューズレターには掲載できなかった箇所も収録されています。